The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自同表現をめぐって
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1989, 23, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

自同表現をめぐって

森 山 卓 郎

1 はじめに

仕事は仕事だ。

仕事が仕事だ。

のような名詞述語文，すなわち，

x（コピュラ的助詞）x（断定詞）

という形をした表現（以下，自同表現[1]と呼ぶ）は，形式的にはトートロジーであり，その限りで情報量はゼロのはずであるが，実際には意味の違いがあり，一定の表現価値を持って我々の日常言語で使用されている。この種の表現の意味とは，どのようなものと言えばよいのであろうか。また，そうした意味となる原理は何であろうか。

自同という論理関係と意味の関係をどうとらえるかという問題に関しては，大きく，語用論的に説明する立場と意味論的に説明する立場との二つがあった。前者の語用論的立場は，Levinson 1983 のように，Grice の会話の協調原則による推論から，会話の含意としてその表現の意味が引き出されるという立場である。この立場によればトートロジー的条件文なども同様に扱えるほか，自同表現を言語普遍的にとらえることができる。一方，後者は Wierzbicka 1987 のように，意味の慣習性や言語固有性を重視して，意味論的な問題として扱うことを主張する立場である。彼女は6種のトートロジー構文を分類しているが，同時に，例えば，“War is war.” が

言えても“＊ Wars are wars.”が言えないことや，英語の“Boys are boys.”に対して，ポーランド語での該当表現は不自然だといったことから語用論的説明を批判している。

確かに，語用論的な立場からの統一的・原理的説明に大きな魅力はあるが，個々の言語における名詞の取り上げ方，断定の仕方には違いがあり，少なくともすべてを語用論的に説明することには無理があると言える。まず文法形式に関する問題を整理した上で，このような特殊な表現が成立している原理的な問題を考える必要がある。従って自同表現を考えることは，助詞による名詞の取り上げ方や，名詞述語文の叙述の類型の問題などの文法形式の分析でもあり，また，それを支えるところの情報伝達機能を考えることにもなるのである。対照研究の視点ではハ・ガ・モに酷似した形式を持つ朝鮮語において，日本語と極めて似た自同表現の意味・用法があるという問題や，特にxハxダ型に類するものは，他の言語にも程度の差はあれ，いくらか普遍性が認識されるということも興味深い。[2)]

2　xハxダ型

まず，xハxダ型の意味について考える。この意味関係には，名詞の取り上げ方による違いが考えられる。第一が記号レベルのもの，第二が意味的に他の関与を否定するもの，第三が属性を問題とするもの，である。これら三つの解釈を「王選手は王選手だ」を例にして以下に考えてみる。

まず一つの例は，野球の話をしていて，聞き手が「オウ選手って誰？」と聞き返して，「何言っているんだ，王選手は王選手じゃないか」と言うような場合である。発話者のいう「オウセンシュ」という音形式が聞き手の理解する「王選手」と同一であるということを述べるような意味になる。つまり，記号自体をメタ的に取り上げて，確認的に繰り返しているに過ぎない。その意味で，情報的には何ら付け加えることにもならない。これは，

記号「王選手」の指示の同一性を確認するような意味だと言えるので，記号的同一性確認のタイプと呼ぶ。記号的同一性確認のタイプでは，主語名詞に制約はなく，例えば，

「ア」は「ア」だ。

のように，音韻的な記号の同一性を主張する場合さえ有り得る。さらに，名辞に対して一種メタ的に内容部分を同定するものなので，

「ア」というのは「ア」だ。

王選手というのは王選手（のこと）だ。

のようにトイウを主語部分に付けることができる。このような完全な自同関係が有り得る理由は，コミュニケーション上の障害とそのチェック，すなわち，伝達段階において話し手の言語記号が話し手の意図通りに聞き手に受け入れられるように，ことばを確認する繰り返し（同一的な言い直し）である。伝達関係にないにも拘わらずこのような発話をすると（例えば全面的な独話）ナンセンスであり不自然である。このタイプは，そういう理由で有意味な自同関係ではなく，考察の圏外に置くべきであろう。

次に考えられるのは，記号的なレベルではないが，指示の同一性だけを主張し，結果的に他の関与を否定するタイプである。例えば王選手が別荘を持っていて，それを掛布の妻が羨むとする。そこで掛布が，「王選手は王選手だ」と言う場合などがそうである。これはもちろん「王選手」の意味は聞き手においても同定されていて，単に記号的同一性を表すタイプとは違っている。それで「王選手というのは王選手だ」という言い換えはこの意味ではできない。また，指示対象の同一関係だけを主張する点で，「彼は彼だ」のように，指示機能だけで属性概念を有しない代名詞でもよい。この点で次の属性を問題とするタイプとも区別される。意味的には，「王選手は王選手であり，ほかの人間（自分）とは違う」という意味である。この特殊な場合として，人間の関与領域の同一性だけを確認する意味

もある。例えば，王選手が家庭問題で悩んでいるという状況で，「王選手のことは王選手が決める」というような意味で「王選手は王選手だ。（君は口を出すな」）というような場合である。人間の意志決定に関する関与領域の同一関係，裏返せば排他関係，を確認するような意味である。

以上のようなタイプを同一指示の排他的確認と仮に呼んでおく。[3] ちなみに日本語では少なくとも中古からこのような語法があり，和泉式部集に次の例がある。

君は君我は我とも隔てねばこころごころにあらんものかは

最後に考えられるのは，さらに意味的なものである。例えば，王選手がタイムリーなホームランを打った後で「さすが，王選手はあの王選手だけあって」というような意味で「（さすが）王選手は王選手だ」と言う場合である。この場合，「王選手はよく打つ」というような属性が話し手・聞き手に共通に理解されていなければならない。特に属性が明確な名詞でなければならず，「王選手」はかろうじて言えても，特にそのような属性読みを誘発しない名詞（例えば「太郎」）では少し不自然だし，代名詞のような名詞は除外されることになる。また，「戦争は戦争だ」などの属性的な名詞の方がさらに言い易いであろう。何らかの属性を持つ名詞において，その属性の一般性を確認するような意味である。これを属性確認用法と呼ぶ。属性を確認する意味なので，属性に対する評価，すなわち「だけのことがある。」「でしかない」などのように，属性内容に関する限定的な評価をつけることができる。[4]

王選手は王選手だけのことはある。

遊びは遊びでしかない。

また，主語名詞に対する属性表現であり，状況の如何に拘わらない属性を表すという意味で，

遊びは，〔常に／何といっても／いわゆる遊びだ〕。

のように，述語において「常に／何といっても」のような副詞や「いわゆる」のような連体詞が入る。これらは述語属性の普遍性ないし一般性だけを表す。[5] 一方，前述の同一指示だけを表すものでは，述語が属性を表すわけではないので，「彼は〔何といっても彼だ〕」のような言い方はできない（文の主張全体を作用領域とする意味は可）。

以上のような三つのタイプは，名詞をどういうレベルで取り上げるかという点（記号レベル，同一指示確認，さらにその一般化された属性的側面の確認）で違う。これは名詞文のタイプの違いでもある。一方，論理関係は，すべて主語名詞を述語名詞と同一だと確認している点で同じである。

では論理的同一関係の確認とはどういうことだろうか。我々の日常言語では，名詞の意味の中に前提的に組み込まれていることでも，その意味（内包的意味）や，同一・非同一関係を確認しなければならないような場面がしばしばある。例えば，

王選手は人間だ。（だから疲れることもある。・・）

における「王選手」は「選手」である以上〔＋人間〕という意味素性を持っているはずである。しかし，前提的な意味はいわば背後の意味であって，情報の焦点になれない。そこで，敢えてその属性「人間」を述語に据えるのがこの文である。背景知識と述語名詞との関係だけで言えば，この文も自同表現と似ている点がある。このように，我々の情報処理活動では，前提的な情報は，背景知識としては理解されていても，意識的にその前提的属性・同一性が確認されるには述語として述べ直さねばならない[6]。

さらに派生的な用法として，属性・帰属を表す述語部分の意味を問題にする場合，その意味が典型的に同定できるものではなく同定可能な範囲ではあっても境界線上のものという意味を表すものがある。

ペンギンは鳥は鳥でも飛べません。

鳥は鳥でも飛べない鳥は？

のように，自同表現によって述語の述べ方そのものを確認・同定し，属性・帰属関係の範囲を辛うじて満たしていることだけを述べるからである。それで中心属性「飛べる」を否定する意味と呼応することになる。「？？鳥は鳥でも泳げない鳥は？」は帰属の境界性と非典型属性を譲歩的に呼応させるので不自然である。

食べたことは食べた。（≒食べはした）

も同様で，「食べた」と言えるだけの最低属性を満たしているということを，その範囲だけで主張・確認する意味である。そこに譲歩的なニュアンスが生ずる。述語の内容的意味の側面だけを名詞化して取り上げ，自同表現の属性・帰属関係の確認を対比的にすることになるからである。[7]

3　xガxダ型

事件が事件だ。（だから皆が注目した）

時間が時間だ。（だから食堂が　開いていない／混んでいる）

のようなxガxダ型の意味は，単なる同一性確認とは違い，主語名詞が何か特に問題になるということを表す。特徴を以下に見る。

まず，このような文の使用される状況は，必ず何らかの特定的な場合でなければならないという点である。特にxガに当たる名詞は特定の状況を指すものでなければならない。「時間が時間だ」などという場合，具体的な「ある時間」について問題にするような文脈が必要である。これは，

＊どんな場合でも，時間が時間だ。

のような成立する場合を特定化しない文が不自然なことから明らかである。このことは，時制の問題にもつながっている。すなわち，特定状況だから，

時間が時間だった。

のように表す事態が過去のことであってもかまわない。先のxハxダ型の場合，命題内容自体は恒常的であって，過去時制は過去における確認なり

認識を表すか，疑似的に気付くような意味を表すかのどちらかでしかありえないのと対照的である。さらに，ｘガｘダ型は，文脈に独立して登場しにくく，「時間が時間だから／だけに」のように原因・理由節内部の方が安定する。これは，特定状況を表すにも拘わらず新しい情報の展開をそれ自体で表せないことに関わっていると言えるのかもしれない。[8]

さらに，主語名詞と述語名詞の関係を考えてみると，語彙的に固定化した特殊な表現ではあるが，

気が気でない。

世が世なら，＝世が世でなかったら，

のように，否定したタイプがよく使われるものや，否定しても意味に大きな違いが出てこないものがある。[9] これらの例では，文全体の意味として，「普通（想定通り）ではない」という意味があればいいのであって，

時間が時間（普通でない）だ。

気が（普通でいられるような）気ではない。

のように，述語名詞の意味の在り方を反対に評価していることになる（否定の場合，述語名詞は普通の状態を指す。ｘハｘダ型と対照的である[10]）。

以上を整理するならば，ｘガｘダ型の文は当該名詞の特定の文脈状況における在り方を確認する意味であると言える。敢えて言い換えれば，

コノｘガコノヨウナｘダ

という意味である（コソアは文脈によりいずれでもよい）。

4　ｘモｘダ型

ｘモｘダ型は，基本的にはｘガｘダ型の延長線上に考えることができる。

教師が教師なら／だし，学生も学生だ。

教師も教師なら／だし，学生も学生だ。

のように，「ｘガｘナラ／ダシ，ｙモｙダ」の後半部が独立したものと言

える。意味的にも，xガxダ型と同じく，特定状況における普通でない在り方を問題にしている。こう考えると，xモxダ型の持つ特定的な（異常な）という含意は当然のこととして説明される。特殊事態の並列が基本的意味だからである。xガxダ型同様，助詞個有の意味の側面が強い。

事態が並列されるということは，モは主語名詞だけを取り立てるのではないということである。例えば「夏も近付く八十八夜」は，ほかに「近付く」ものがあるわけではなく，むしろ，「夏が近付く」という事態を他の状況的な事態に並列させて述べているに過ぎないということから明らかであろう（益岡1989他参照)。特に，自同表現のような関係では，主語名詞は述語名詞と同一だから，主語名詞だけにモを作用させるようなことはできない。そもそも特定要素に対する範列的意味関係を自同表現で取り上げると，同一的論理関係を壊す要素の存在を認めることになるからである。

仕事（＊さえ／＊まで／＊くらい／＊ばかり）仕事だ

＊仕事しか仕事でない。

のように，他の副助詞とは違い，モは名詞述語文でも文全体に作用する。

他の事態に加えて，並列的に事態を述べることの意味は，「こりゃまた何だ！？」のような「また」のような副詞に連続するかもしれない。当該事態が意外・心外であって，想定されている事態の集合の中にはなく，敢えて付け加えなければならないということを表すと考えられるからである。[11)]

5　自同表現の情報機能

以上のように見てくると，意味・用法は全く違っているが，xガxダ型の意味も，前述のxハxダ型文（属性確認的な用法）の意味も，まさにその名詞の属性・様態的側面を取り上げて確認するという点で，基本的には同じだと言える。すなわち，名詞の属性的・様態的側面は通常，語彙的意

味として了解されているか，あるいは発話の状況において背景的に了解されているだけである。その背景的な了解内容を，言語的に確認する手段が，述語として述べることだと言えよう。述語として叙述するということは，明示的な情報として話し手が構成して見せることだからである。このように，ア・プリオリに同一であっても，人間の人間らしい認識においては，その同一関係を確認する必要があるのである。

なお，ｘハｘダ型における排他的な同一確認の用法の存在などは，当然属性を含意しえないのであり，いかなる状況のもとでも同一的な関係が成立するということを確認することになる。逆に言えば我々の日常生活では，さまざまな事象，概念などのさまざまなレベルでの同類化を多くしているということである。

ｘハｘダの属性用法も，どのような状況であれ，ｘの持つ属性に違いはない，という意味で，属性の同一性を確認するものである。ただ，具体的にどのような属性であると解釈するかは，推論による。同様に，ｘガｘダでは，ｘが特定状況であることを表し，特殊性を強調することになる。ここでも，その具体的な状況がどのような状況であるかは，推論しなければならない。その意味で，発話の最終的意味をどう解釈するか，という点では，ほかの文と同様，会話の協調原理に支配されていると言える。特に，自同表現のように具体的情報を与えていないものでは，そうした推論に依存する度合いは相対的に大きいと言える。しかし，このことは，最初に述べたように，推論作用のような語用論的問題で初めから総てを解決すべきだということではもちろんない。[12)]

このように最終的な意味に関して，聞き手の知識や推論に大きく依存する点は，それはそれとして表現効果の一つである。具体的に指定して表現せずに済むということがまず挙げられるし，場合によってはより印象深いということも挙げてよい。

ただ形式的な差異の問題がある。モについては前に述べた通りなので，特にハとガによる名詞の取り上げ方の違いに関して考える。これには，種々の議論が有り得るが，その中で特に関係の深いものは，

もやしは安い。：一般的な属性

もやしが安い。：ある特定の状況における（一時的）在り方

のように，ガは限定された状況における存在を表すということである。一般的なハ・ガの現象との関連で言えば，まず，ハは，対比的な意味を持つということがある。対比されるということは，ほかと違ったものとして認定されている（もしくは認定されうる可能性が）必要がある。これがいわゆる文脈的に導入ずみ（既知扱い）と言われるものの基本的原理と言える。既知のものについて，何かを指定したり，属性を与えて記述するのは，最も中立的な述べ方であり，特にその状況だけの特定の関係づけということにはならない（もう少し積極的に，田窪1989のように知識の表現だと言ってもよい）。そこで，このような確認的な用法になると言えるであろう。

一方，ガは，本来的に述語から切り離されない構造であり（連体節内部の出現など），述語の表す事態によって，その存在が文脈上に導入されると言えるであろう。「空が曇ってきた。雨が降ってきた。」のように，いわゆる新情報においてガが取り上げられるというような現象も，述語の表す事態とともに，文脈的な存在が導入されるからである。こうして述語に結び付いた文脈的な存在導入が，名詞を特定の事態に位置づけてとりあげる原理となっている。特定の事態とは，述語によって設定されるからである。従って，動詞述語のように，必然的にある特定の時空の事態を設定するような述語の場合は，ガが出現しやすいことになる。一方，名詞述語のように，述語自体に時空の特定性がない場合に出現したガは，「彼が教師だ」のように，あえて述語「教師だ」を特定の時空において成立した事態だととらえることになる（例えば今まで学生だった人が教師になったのを

発見したような場合)。さらに，事態の特定性が文脈レベルで問題とされる場合，すなわち，すでに述語部分が既知であって，対応する主語名詞を求めるような場合も，主語名詞の取り上げ方は特定の事態に結びつけて導入提出するような意味（「学生は誰だ」に対して「彼が学生だ」と答える場合）である。ここから，xガxダ型の意味もガの特性（述語に結び付いて特定の事態・文脈状況に導入される）から説明できそうである。

もっともこの種の問題は従来実にさまざまな議論のあったところで，限られた紙面で到底議論できるところではない。ただ，自同表現の意味が，ハ・ガの基本的意味から説明でき，単なる慣用表現でないとは言える。

以上，自同表現の意味・用法を形式的な観点と情報機能としての観点とから検討した。まず，それぞれのタイプの様々な意味を分析し，それが，形式的に説明できることを見た。そして，すでに情報的に前提となっていても，あえて，それを判断として提示すること自体に意味があるという，その意味で人間らしい情報の操作・処理のありさまに注目する必要性についても強調しておきたい。

注

1) もちろんフレーゲが問題にしたように，Bedeutung は同じでも Sinn が違う場合は，自同表現には入らない。ア・プリオリなx＝xという関係を考える。また「私は以前の私ではない」のように指示対象自体が違っている場合も当然除外する。例えば「問ふ人にありとはえこそ言ひいでね我やは我とおどろかれつつ」(清少納言集)なども，興味深いことに，断り(存在空間の規定)はないが「私」の指示するものは違うと言えるであろう。

2) 「戦争은戦争이다（戦争は戦争だ）／時間이時間이다（時間が時間だ）／学校도学校이고，学生도学生이다（学校も学校だし，学生も学生だ。）」（朝鮮語）「戦争就是戦争（同）／你是你，我是我。（君は君，僕は僕）」（中国語。）なお意味的に同一性確認のものは，言語普遍的な可能性もある。

3) 「彼は彼だ」のような代名詞を許すように，指定的な対応関係だけを述べるのがこのタイプである。属性用法では通常代名詞は不自然である。

4) （独立）文を限定的に評価することについては，述語の何らかの属性的内

容的側面が，重大なものと評価されたりされなかったりするということであろう。別稿で考えたい。

5) 「王選手は人間だ」が言えても「？人間は王選手だ」が普通は言えないように，属性を述べる場合は述語名詞の集合の方が大きい。述語名詞がより一般的普遍的にとらえられるのでこうした現象がある。

6) ここで「王選手も人間だ」のようにモの方も出現しやすいのは，特に指定的な場合を除いて，述語の集合が主語の集合よりも大きいことによる（注5も参照）。すなわち，他の「人間」に当たる集合の存在を前提として，それに累加するという意味関係のためであろう。つまり，ほかにはもちろんとして，さらに「王選手」を累加するところに，最もその命題が成立しにくいものという含意が読みこまれるものと思われる。必然的な属性・帰属関係を述べるのであるから，命題を成立しにくいものとして扱う方が情報的に意味があることになる（ｘモｘダ型については後述）。

7) 尾上1981では，述語のコピーという表現を使う。後部は動詞形態で残る。

8) 一般的な知識の確認ならともかく，わかりきったことを特定事態として表すには，積極的な理由が必要である。そこで，一種の判断材料としてとらえられることが多いということであろうか。今後，文の情報的な独立性のようなことも考えたい。

9) 「予算が予算でなかったら」のような表現はある程度一般的である（金水敏氏の直話）。その際は「予算が予算なら」と同じく，特殊性を表す。

10) 実際否定関係になってしまえば，ア・プリオリな偽の判断になってしまい，自同表現とは言いにくいことになる。自同関係は，その意味で，主語と述語の結合に対して否定的ではありえない。ムード副詞の共起も同様で，例えば「多分ｘはｘに違いない」「多分ｘがｘに違いない」のような蓋然性判断のムード形式が共起すれば，前者の場合，そのような判断が，ある状況においても有効性であるという蓋然性の判断を表し，後者では，同様の意味が，さらに実際的な状況に結び付けられて，ｘが特殊な状況であるという命題の成立に対する認識的判断がなされていると言える。作用領域は，「多分〔ｘハｘダ〕ト言エル」であり，いわば，主張部分（発話行為的なところ）に係っているのであって，いずれも主語と述語の結合の仕方そのものを疑っているわけではない。それで，「？？ｘハ多分ｘダ／？？ｘガ多分ｘダ」のような主語のあとに副詞を挿入すると言いにくくなる。作用領域について言えば，「ｘハ，〔多分ｘ（といえるもの）〕ダ」という把握は不自然なのである。これも基本的には否定可能性の問題だと言えよう。

11) 「何もそんなことまで！」におけるモやマデの用法も共通するところがあ

る。「シテモイイ／シテハイケナイ」におけるハ・モの分布（尾上圭介氏の指摘）や，古典語の「もこそ」のような形式の意味も同様に扱えそうである。

12) その意味で，ここでの立場は，意味論的（文法論的とも言える）説明と語用論的説明との二つが共に重要であるという立場であるとも言えよう。

参考文献

尾上圭介　1981「は」の係助詞性と表現機能『国語国文』56—5

坂原　茂　1989「自然言語理解での論理構造解析に対する言語外的知識の役割」特定研究報告書（長尾真）

田窪行則　1989「対話における知識管理について—対話モデルからみた日本語の特性—『アジアの諸言語と一般言語学—西田龍雄教授還暦記念論文集』（同編集委員会編）三省堂

沼田善子　1987「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』（奥津敬一郎・沼田善子・杉本武）凡人社

野本和幸　1988『現代の論理的意味論』岩波書店

益岡隆志　1989「とりたての焦点」（未公刊）

森重　敏　1971『日本文法　主語と述語』武蔵野書院

森山卓郎　1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院

1989「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』（仁田義雄・益岡隆志編）くろしお出版

Levinson S.　1983 “Pragmatics” Cambridge U. P

Wierzbicka A.　1987, Boys will be boys: “Radical Semantics” vs “Radical Pragmatics”’ “Language” 63

（文学部講師）